

第3回佐倉市地域福祉計画推進委員会 議事録

開催日時	令和7年3月24日（月） 午後2時30分～4時30分
開催場所	佐倉市役所1号館6階第1会議室
出席者	宇田川 光三委員、川根 紀夫委員、黒田 聡委員、 小林 眞智子委員、近藤 美貴委員、住吉 アキ子委員、 深沢 孝志委員、森本 直樹委員
欠席者	なし
事務局	山本 淳子（福祉部長）、中村 圭司（社会福祉課長）、下地 正史（社会福祉課管理班長）、井上 睦（社会福祉課地域福祉班長）、栗原 康彰（社会福祉課主査）、橋口 庄二（社会福祉課主査補）、村元 京平（社会福祉課主査補）、関 光一郎（社会福祉課主任主事）、齋藤 潤（社会福祉課主事）
関係者	岡本 一成氏（社会福祉法人佐倉市社会福祉協議会）、 岡本 祥子氏（社会福祉法人佐倉市社会福祉協議会）
議 題	1. 議事 （1）第5次佐倉市地域福祉計画の進捗管理について （2）令和6年度生活困窮者等のための地域づくり事業 事業評価シートについて 2. その他
配布資料	資料1 第5次佐倉市地域福祉計画の進捗管理について 資料2 令和6年度生活困窮者等のための地域づくり事業評価シート 資料3 令和7年度スケジュール表 資料4 【令和6年度確定版】市民意識調査 （以下、当日配布） 資料 アウトリーチ支援全体件数 資料 個別支援・地域支援 活動圏域別件数 資料 相談件数・プラン件数 資料 地域支援 アウトリーチ先
傍聴人	1名

1. 開会

今回の議事録確認者は、小林会長と深沢委員の2名であることが確認された。

2. 議事

（1）第5次佐倉市地域福祉計画の進捗管理について

資料1に基づき、事務局から説明を行った。

○意見、質疑等

【会長】

- ・ 事務局の説明に対し、ご質問、ご意見等あるか。

【委員】

- ・ 資料1の進行管理シート中、「課取りまとめ用」シート下段の「総合評価」欄。「B 計画通りに事業が進んでいる」と、「C 予定通り事業が進んでいる」の違いがよくわからない。

〔事務局注〕（資料の当該箇所については事務局の誤記であったため、会議後に差し替えた。）

【委員】

- ・ AからDといった評価は、何に基づいて行うのか。

【事務局】

- ・ 各年度の目標値が基準となる。

【委員】

- ・ 「担当課提出用」のシートは各担当課で記入し、「課取りまとめ用」のシートは事務局で記入するものか。

【事務局】

- ・ 各担当課が「担当課提出用」のシートに記入した部分は、そのまま「課取りまとめ用」のシートに転記されるよう設定する予定。

【委員】

- ・ 数値目標による指標なら達成率が出せるが、そうでない場合、評価するためには取組状況等をそれぞれの担当課に示してもらう必要があると思うが。

【事務局】

- ・ 事務局では、原則としてシート上の「取組状況」欄や、「C，D評価だった場合の理由」欄で判断していくが、それだけでは評価し難いという場合は、担当課に情報を求める。委員の評価において、より詳細な情報のお求めがあれば、随時、事務局で調整したい。

【委員】

- ・ 達成率が数値化されることにより、達成度合いが良ければ評価も高くなる。しかし、想定以上の成果が出ているということは、目標が低すぎたのではない

かという評価にもつながる。そうした場合、委員としては、どのような評価のしかたをすればよいのか。

【事務局】

- ・ そうしたご意見も含めて、評価を記入されたい。その後の対応をご相談させていただく。

【委員】

- ・ 各委員がシートに記入したものは、各委員の評価。それを、この委員会の場で調整したものが、最終的な評価になるという理解でよいのか。

【事務局】

- ・ 各委員に記入いただいたものを事務局でとりまとめ、委員会に提示し、調整していただく予定。

【委員】

- ・ 達成率の考え方は、計画最終年の目標に対する率か、各年度の目標に対する率か。

【事務局】

- ・ 各年度の目標に対する達成度合いで評価していただく。

【委員】

- ・ 各年度の目標値は、どこで確認できるか。

【事務局】

- ・ 計画書にはそこまで記載していないが、評価する段階で、進行管理シートにおいて提示する。

【委員】

- ・ 数値目標のない指標についても、想像だけで評価してはいけない。

【委員】

- ・ シートには詳しく書いてほしい。

【委員】

- ・ 第5次地域福祉計画では、SDGsの視点を取り入れ、施策単位に紐付けた。SDGsの評価は、今回の進行管理シートには落とし込まず、また別枠で考えるという理解でよいのか。

【事務局】

- ・ 計画策定の過程で、SDGsの評価も併せて行おうという意見も事務局内に

あったが、市の総合計画自体がまだそうした段階でないということもあり、今回の評価においては、分けて考えていただきたい。SDGs の評価については、検討中の状況。

【委員】

- ・ もったいないと思う。市は地域再生計画を策定していたと思うが、そちらでは評価することになっていたのではないかな。福祉分野も含まれていたと思うので、そちらの評価との整合性などがあるのだったら…

[事務局注]（その場で事務局が市ホームページを確認し、「地域再生計画」はないと説明した。しかし、会議終了後に事務局から企画政策課に確認したところ、「地域再生計画」にあたるものとして、かつての「佐倉市まち・ひと・しごと創生推進計画」があり、現在は第5次佐倉市総合計画中期基本計画の中の重点施策Ⅰ「地方創生の取組（佐倉市デジタル田園都市構想総合戦略）」として引き継がれているとのことであったため、後日、訂正の連絡をした。

（２）令和６年度生活困窮者等のための地域づくり事業 事業評価シートについて

資料２及び当日配布資料に基づき、事務局及び関係者（生活困窮者自立支援事業の受託事業者である、社会福祉法人佐倉市社会福祉協議会職員の２氏）から説明を行った。

○意見、質疑等

【会長】

- ・ 現場の声も聞くことができたが、ただ今の説明に対し、ご質問、ご意見等あるか。

【委員】

- ・ 前の議題の進行管理シートでも、例えば重点施策としてのアウトリーチ支援などを評価することになるが、地域づくり事業としてのアウトリーチについては、それとは別に評価等していくということか。

【事務局】

- ・ ご認識のとおり。

【委員】

- ・ 前回も指摘したが、この地域づくり事業は、地域に出向いて活動内容を宣伝するもので、アウトリーチと言えるものではないと思う。この活動を実績数に含めるのは、水増しである。まずは支援がベースにあるべきで、そこから地域

づくりにつながるというのならわかるが、これは順序が逆。人材と時間の浪費であり、評価できない。

【事務局】

- ・ 確かに、地域づくりは直接的な支援を行う活動ではないが、自ら声を上げられない方を発見していくことに重点を置き、個別支援の土台として行っているもの。また、実績数については、個別支援と地域づくりを明確に分けてシートに記載し、お示しするものとしている。

【委員】

- ・ 地域づくりはアウトリーチとは言えないのだから、事務局は認識を改めて、アウトリーチの実績から外してほしい。

【委員】

- ・ 狭い枠組みで考えれば、アウトリーチは相談に限るというご指摘もわかるが、国においても、この用語の範囲がかなり広がってきている。社会福祉法に地域福祉がうたわれるようになってから、啓蒙啓発も含めてアウトリーチという用語で整理するという使い方が定着してきている。

【委員】

- ・ 表記については改めて検討しないといけませんが、アウトリーチという用語は、まちまちな使われ方をしているというのが実態である。

【会長】

- ・ この件については、ご意見として伺うこととしたい。

【委員】

- ・ 第5次地域福祉計画にも、生活困窮者自立支援事業に関連し、支援プラン決定件数や訪問件数等の指標があるが、これらとの関係は。

【事務局】

- ・ 計画の指標とは別に、地域づくりにおけるアウトリーチの評価を、この委員会においてお願いするもの。
- ・ 本日の配付資料「相談件数・プラン件数」のグラフでは、相談件数を延べ件数で表記しているが、計画の指標としている新規相談件数のほうは、電話による相談を経た後に、実際に相手を特定して相談が始まった件数としている。その意味での令和6年度実績数は、2月時点で537件。

【委員】

- ・ 計画の指標とは別に、あくまでも地域づくりに係る評価を行うものとして理解した。

【委員】

- ・ 地域づくりについて、指標のようなものはあるのか。

【事務局】

- ・ 現状としては、今回資料とした、各項目の件数のみ。新たな事業なので、来年度以降も検討してまいりたい。

【会長】

- ・ では、各委員におかれては、地域づくりの事業評価シートに評価を記入し、期日までにご提出願う。

3. その他

資料3及び資料4に基づき、事務局から説明を行った。

○意見、質疑等

【会長】

- ・ 事務局の説明に対し、ご意見等あるか。

【委員】

- ・ スケジュールに関しては、計画の進行管理シートを4～5月頃に事務局でまとめ、6～7月頃に委員のところに届き、11月頃の委員会までに評価するといったイメージか。シートはかなりの枚数になると思うが。

【事務局】

- ・ あくまでも目安ではあるが、その予定。シートについては、電子メール等でデータの受け渡しをすることを想定しているが、ご希望により、紙帳票での提供にも対応する。

【委員】

- ・ 生活困窮者の支援は、経済の面に限らず、生活全般に及ぶもの。資料の市民意識調査の自由記述欄に、老々介護と思われる事例が見られる。公的な支援も受けてはいるようだが、それでも疲弊している様子。「レスパイトの介護施設もなく」云々と。こういった方を掘り起こすというところまで、未だ至っていない。

【委員】

- ・ これこそまさにアウトリーチの対象で、専門員がすぐに駆け付けなければならない。公的支援を受けているということは、地域包括支援センターで把握しているはずだから、センターに話を聞けば把握できること。他の自由記述を見

ても同様で、これだけ困窮者の声を拾えるのだから、地域づくりなどをやっている場合ではないと思う。

【会長】

- ・ しかし、民生委員の会議にアウトリーチ支援員が毎回出席することで、困窮者が支援員に繋がり、更にそこから地域包括支援センターに繋がったという実例もある。やはり、地域づくりの取組は、我々が意識するという意味でも、大事なことだと思う。

【委員】

- ・ これらの自由記述からは、公的サービスが基本的なニーズに応えきれていないことが伺える。これはまた、どこに相談すればよいかわからず困っている人を、郵便局、地区社協、自治会といったネットワークの中で拾い上げるという、もう一つの流れの必要性が示されているのだとも思う。ただ、そのことと評価との関係となると、難しいところ。
- ・ 例えば介護保険サービスの費用は、全体としては増えているが、1人当たりでは減りつつあり、介護難民が増えていく。そういった問題は、今回の事業の中で扱うのが難しい。

【委員】

- ・ 地域づくりは不要とのご意見があったが、私は必要だと思う。様々な公的サービスに繋がっていても、疲弊している方がいる。こういった方が、どこかに繋がってくればよいと思う。

【委員】

- ・ 一方では、介護施設に空きが生じているという現状もある。うまく繋がられていないということか。

【委員】

- ・ 福祉関係者としては、地域包括支援センターがどういう施設か、誰でも知っているものだと思うところだが、市民意識調査によると、「名前だけは知っている」と「知らなかった」の合計が、全体の約6割。その中には、センターを必要としない世代もいるのだろうが、そうした人たちにも知ってもらわないと、困窮者を支援に繋げることはできない。民生委員についても、「名称は知っているが、役割や活動内容は知らなかった」と「知らなかった」の合計が、約4割。成年後見支援センターに至っては、「知らない」が8割以上。アウトリーチ支援員がどれだけ頑張っても、自力で困窮者を探し出すのには限界があるのだから、こうした地域福祉の情報を知ってもらうことは重要であり、地域づくりの根幹ではないか。アウトリーチ支援員が活躍するためのネ

ットワーク化を進めることが、正に地域づくりであり、それも広くアウトリーチという言葉で捉えて取り組んでいく市の姿勢に、私は賛同する。

【委員】

- ・ そこにアウトリーチという言葉を使うと、誤解を招く。

【委員】

- ・ それは、言葉の定義の問題。地域づくりのアウトリーチは地域福祉の話であって、個別支援の話とは別。

【委員】

- ・ 地域福祉計画は、地域をつくりながら課題を解決していくものとして成り立っているはず。

【委員】

- ・ 先日、中学校で2年生を対象として避難所ゲームを実施したが、民生委員というものが知られていなかった。

【会長】

- ・ 中学、高校、大学で、やはり民生委員の活動についての啓発は必要。

【委員】

- ・ 3年生は認知症サポーター養成講座に118名参加し、自分たちで寸劇を演じるなどの活動をしている。

【会長】

- ・ 防災は特に重要なことであり、中学生や高校生を、地域の中でうまく活用していく必要がある。

【委員】

- ・ スケジュールによると、委員会での評価が市の各課に届くのが、かなり先になる。意見を活かすための期間が短い気がするので、可能であれば早く進められたい。

【会長】

- ・ 他にご発言はないか。それでは事務局にお返しする。

4. 閉 会